

柩の荷車を引いて歩いたあのときの言い知れない悲しき  
…戦争の犠牲とは兵士のみではありません。

避難中に敢えなく生命を亡くした者、なんらかの形で  
犠牲になった者、この目で見た戦争の悲惨な光景、無惨  
さ、本当にもう二度と戦争はあってはならないと思いま  
す。

その内に満州、特に新京周辺に中央軍と八路軍の内乱  
が起り、日暮れになるとパンパン銃の音、毎夜生きた  
心地がしませんでした。幼児のいなくなった私も必死に  
なって働き、また僅かの暇をみて長男の（もう二年生に  
なっている）教材のない勉強をみてやりながら年も明け  
て漸く二十一年の八月に、コロ島から博多行きの輸送船  
で懐かしい日本へ帰ることが出来ました。

あれから四十五年、日本の再興とともに必死の努力の  
甲斐あって我が家の再建も出来、余生も安穩に暮らせる  
毎日を感謝しておりますが、幼くして亡くした三男に朝  
晩仏壇に向かって回向するたびに思うことは、いずれ私  
もあの世で三男に会って「ゴメンネ…」といって、はじ  
めて我が家の戦争が終わるのではないかと思うのです。

## 奉天の家を追われて

群馬県 山本清子

終戦の年の四月、主人は在郷軍人から応召して八月十  
日頃、一時帰宅を許されて帳簿の整理にと自宅に帰って  
いた。当時は米穀商をしていて配給所となっていた。大  
体の整理をして十四日夕方帰隊して行った。

翌日は終戦で驚いた。七、八人いた日鮮、満人の使用  
人は自然姿を見せなくなって自然閉店となる。ラジオは  
真の平和が来たのですとニュースの度に言ったので私は  
喜んだ。不安な日々を一歳半の長男と過ごしている中に  
武装解除の二十日が来た。

町内は異様に殺気立った空気がみなぎって来た。その  
夜も自分の家で寝ようと思っていたら、日本の兵士が慌  
てて来て、「早くその昭盛国民学校へ避難するよう  
に。」それで子供を背負って逃げた。

それから私と子の難民生活が始まった。資本金が約十

万円で営業して店は順調であったので銀行にも多額の預貯金をしていたがそのまま終わってしまった。米穀雑穀粉類を、こんなことは知らず仕入していたばかりだったので、それが満人、鮮人の暴動のまよになってしまった。

あの晩親子で寝ていたら、間違ひなく撲殺されていたと思うと今こんなに長生きさせて頂いて感謝している。

避難したのは婦女子と、五十歳以後の男子で三百人くらいであった。一夜明けて、ここも危険だということ、近くにあるもと飛行将校の宿舎だという四階建の寮に皆がはいつて、それぞれに自炊ということになった。一部屋に二家族ということ。

その頃逃亡兵といわれる日本の兵士がたくさんいて、日本人の民家に入り込み殺しては金品を奪っているという噂もきいた。無法地帯の恐ろしさだ。そうかと思うと武器を持っているという疑いだけで簡単に中国兵に殺されていく日本人も大勢いて私達は一日一日が生きた心地がしなかった。

年が変わった頃からだんだん治安もよくなって来て、

私達も買物ぐらいには出かけられるようになった。

この北陵区にある航空寮も安全ではなく縁故者のある人はそこを頼って行くようにと命令が出て、三々五々出て行く人がいて私は真先に出た。引揚げまでそこにいた人も三分の一ぐらいおられたのではないかと思う。

私たち母子は知人を頼って市内の商家に同居させて頂いた。その内主人が復員して来たのでまた別の知人が経営しているでんまやビルの上がアパートになっていてそこを貸してもらって親子三人の生活が始まった。引揚げまで一年くらい暮らした。

始めに奉天で同居させて戴いた家でソ連兵に会い子供を背負って頭は丸坊主にして男装していたので乱暴だけはされずに済んだが持っていたお金は大半とられてしまった。

私は昭和十五年秋に山本寅重に嫁いで来ました。それからすぐ大東亜戦争でした。店の商売も配給制度となり切符制でした。順調に行き十九年に長男が生まれたとき、この子の大学資金は心配ないと思つたものでした。

好調子で世間からうらやましがれ、またねたまれたこと

もありました。

終戦の年の夏郵便局に勤めている人たち（いわゆる公務員）は、どこからかの通達でしょう、こそこそと家財道具を馬車にのせて街へ街へと引越してゆくのが目立ちました。陸軍の留守家族はいち早く内地へ帰国していたと後日ききました。終戦が民間より早く判っていたのです。

その次が官公吏その他です。奉天市に残っていた人は商人（町人）が多かったようです。

銀行預金も引出せず、長蛇の列では子連れ私では到底、と思ひ諦めました。いくらあったかも分かりませんが、私は逃げるとき四、五万円ありまして一万円近くを隣の中国人夫婦に預けました。それと米一、二俵を食べさせて下さいと言って、それと防空壕に非常用のトランクがありましたので、それを一つ依頼しました。

お金は分散していた方がよいと考えたのです。その奥さんは今晚一晩で暴動は治まるだろうから一晩かくまっ上げるからと言ってくれ、一寸判断に迷いましたが日本人と行動を共にした方がよいのではないと思ひ好意を謝し

て出かけました。となりに引越して来てすぐ赤ちゃんが生まれ、女中さんつきで旦那も上品な中国人で、奥さんは女優さんのように美しい人でした。どこかに勤めている御主人でしたが、まだ私たち交際の口が浅くてくわしいことは分かりませんでした。

当時、満人には米一粒も配給がありませんでしたので、見たところ良きそうなたちでしたので、三キロ、五キロと時折分けて上げていました、公定価格で。

後日主人が復員して来て先ず我が家と思つて行つて見たら空っぽとなつていた。何一つ残つてなくて窓も戸もわれたままで何百人もの暴徒に襲われたとのことでした。

となりの奥さんに会つたら私が預けたものを全部返してくれました。その上、日本人の格好（軍服）では危ないからとそれを風呂敷に包んでくれて着替えに中国服を貰いました。私の分女ものの中国服も二、三点くれました。私も着の身着のままですでしたのでその中国服がどれだけ助かったことでしょう。

お金もそのまま返してもらひ、主人は米は食べて下さ

いと言って貰ってきませんでした。本当に感激でした。今でも会ってお礼を言いたい思いです。使っていた満人の一人が引揚げるまで私たち三人の面倒を見てくれました。会えるものなら会ってお礼を言いたいです。

## 満州からの引揚げに泣く

北海道 小島 まつよ

小島俊雄（当時は独身）昭和十年八月、牡丹江市に住む叔父のすすめで樺太敷香町より渡満した。

その後、満州電業牡丹江発電所に勤めていた俊雄と昭和十六年に結婚し、女兒二人に恵まれて楽しい生活が続いた。

夫は昭和二十年七月、召集となりソ満国境近くの東寧の部隊に入隊、八月九日頃ソ連の参戦により、日本人は敵国の真中に投げ出されたのも同様、治安は悪化、ソ連軍は攻めてくる。我々は居住地林口村から牡丹江市方面に避難を始めた。

頼りにしていた鉄道は爆破されて寸断、やむなく三歳と一歳の子供を連れて夜行軍である。

空腹と疲れで泣く子供。班長から敵に気付かれる、と叱責される。

泣く子供を着類でくるんでみたり、本当に自分も子供と一緒にかくれ泣きをして、一夜を明かしたことでした。

河向は牡丹江なのに、血の出るような苦行です。途中、小休止がかかると、子供のおむつを洗い原野に乾かしておき、取り込みに行くと半分はなくなっており、世の中集団になると様々な人が入り交じっていて、油断をしておられないとつくづく、みじめさにただただ泣き寝入りより仕方なく、そんなことでやっと牡丹江に到着してみると、すでにソ連軍の侵入で治安が悪く、牡丹江より南西二里ぐらい元日本軍の飛行場海林にも兵舎もあり、ある程度の施設も残っている、との情報で休むこともできず、すぐ海林に向かってまた行軍。多少の貯えもあつたので、途中満人の農家で、トウキビのパンを買求める途中、ソ連の銃撃があるかも知れないとの情報。子供